

## 小学校家庭科の手縫い学習における生活実践状況と課題

飯田容子\*・石島恵美子\*\*

(2016年10月28日受理)

Issues Encountered in Learning Hand Sewing in Elementary School Home Economics

Yoko IIDA and Emiko ISHIJIMA

キーワード: 小学校、家庭科、生活実践、手縫い学習、消費者教育

本研究では、小学校家庭科における手縫い学習の有用性を高めるために、生活実践力を「ものづくり」「衣服の管理」「衣服の選択・購入」の3段階に分けた「衣生活の生活実践力を育む学習の構想」の枠組みに則って分析した。第1に手縫い学習の位置づけを明らかにするために学習指導要領と教科書の分析を行った。第2に手縫い学習後の学習者の生活実践状況と意識変容を明らかにすることを目的として、大学生に質問調査を実施し、分析を行った。その結果、学習指導要領と教科書は、手縫いの知識と技能を習得させるための内容が中心であった。生活実践力の「ものづくり」「衣服の管理」において充実しているが、「衣服の選択・購入」については、具体的な記載がなかった。小学校の手縫い学習後10年経た現在においても、大学生は技術面・情意面での効果を認識しているが、生活実践には課題があることが明らかになった。手縫い学習の新たな生活実践力の捉え直しの必要性が示唆された。

### はじめに

手縫い学習には、知識面、技術面、情意面など様々な学びがある。中央教育審議会(2008)では、小学校家庭科の被服製作の意義として、基礎的・基本的な知識及び技能の習得の重要性を示した上で、製作題材に向き合う中で児童が自分の日常生活に関心をもって生活を振り返り、製作物の用途に見通しをもって製作する過程で自分や家族のよりよい生活について考える機会を提供することとしている。今後、手縫い学習をより生活実践に発展できるように再考することが課題である。

---

\*日立市立榊形小学校    \*\*茨城大学教育学部

大学生への手縫い学習に関する調査（飯田 2016）によると、玉結び、玉留め、なみ縫い、ボタン付けといった基礎縫いは、ほぼ8割の学生が「できる」と回答している。習得時期は小学校の時点で、約9割が先生に習ったと回答している。このことから手縫いの習得において、小学校家庭科が重要な役割を果たしているといえよう。

一方、私たちの日常生活はあらゆるものの外部化が進み、生活が便利、簡単、迅速へと変容してきた。それに伴い、学校で学んだ衣生活の知識や技能を家庭生活に活用したり、創意工夫したりする場面も変容してきた。昔は衣類を製作することは生活する上で重要な仕事であり、被服製作教育は生活実践力の育成のために、必要不可欠であった。しかし、現在は多種多様な素材やデザインの中から適切な既製品を購入し、管理することが衣生活における必要な生活実践力の主軸となっている。さらに、子どもたちは、便利になった生活の代償として「手」を動かして物を作る経験が少なくなり、手先の巧緻性や生活技術の低下が深刻になっている（坂井ら 2004）。そこで新しい衣生活の学習目標は、創造性の育成、作る楽しさや成就感、自信、製作したものを活用する喜びなどを味わうことや、製作をとおして商品知識を学ぶことができるようにする（竹吉ら 2006）を加えることが必要となった。前述の調査では、「小学校の時に手縫いの学習は好きでしたか」という問いに対して、「好き・まあまあ好き」と回答している学生は、76%であった。その理由で最も多かったのが「楽しかったから」であった。児童は、様々な家庭環境の中、家庭の仕事にかかわる機会が少なく、生活体験が不足している。生き生きと主体的に活動する体験学習は、子どもたちにとって重要な機会である。

また、横井ら（2003）は、基礎・基本の定着は、習得した知識や技能を活用できる状態にまで高めて初めて確実な定着が図られるとしている。生活の中での活用方法を考えることで、学んだことの有用感をより実感できることを示している。そのために、授業の中で児童が習得した知識や技能を活用しながら課題を解決する過程や方法を学ぶ場を設定することで、成果を工夫し創造する能力と実践的な態度を育む意欲へとつながるとしている。「学び方・考え方」がさらに学び続ける自信や態度、主体性を生み出し、それがものづくりの良さ、楽しさを感じ得けるようになる素地となるものと考えられている。

飯田(2016)は、児童の衣生活における生活実践力を育むために、現代の生活実態に即した衣生活の生活実践力を捉え直し、小学校家庭科の手縫い学習からの生活実践力を、従来の「ものづくり」に、「衣服の管理」と「衣服の選択・購入」を加え、「衣生活の生活実践力を育む学習の構想」とした（図1）。本研究では、手縫い学習の有用性を高めるために、まず、小学校家庭科において手縫い学習がどのように位置づけられているのかを学習指導要領と教科

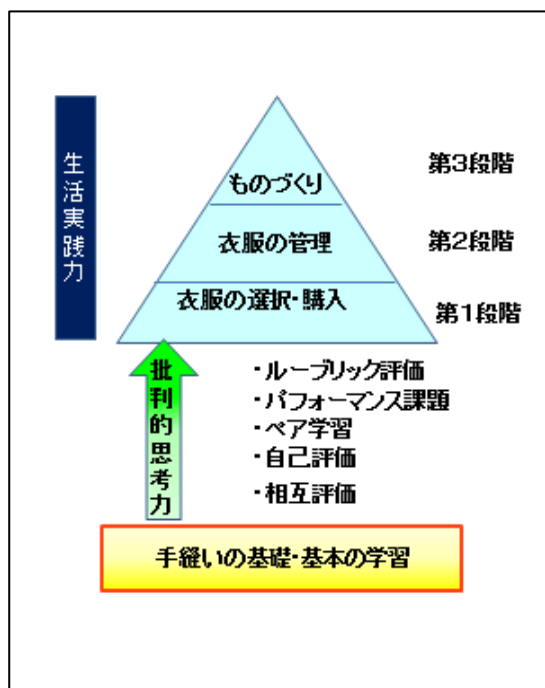


図1 衣生活の生活実践力を育む学習の構想

書を分析することで明らかにする。次に、小学校家庭科の手縫い学習を学んだのち、そこで育まれた知識・技能や意識がどのように生活で実践され、どのように意識が変容していくかを「衣生活の生活実践力を育む学習の構想」の枠組みに則って分析し、明らかにすることを目的とする。

## 研究方法

### 1. 学習指導要領と教科書の分析

現行の学習指導要領と教科書の衣生活分野の手縫い学習に関する記載事項を表1にまとめた。教科書は、現在使用されている小学校家庭科の教科書は2社であり、この2社の教科書で取り上げられている手縫い学習の内容について検討を行う。

### 2. 大学生への質問紙調査

調査は、A大学の大学生72名（男子22名、女子50名）を対象に実施した。対象者は、2年時に開講している「初等家庭科教育法研究」の受講生で、専修は、家庭科、技術科、特別支援、教育基礎であった。質問紙調査の対象を大学生にしたのは、これまで培った意識・知識・技能を自らの意思で活用しやすい点では、高校生よりは適切であり、比較的最近の家庭科教育を受けているという点では社会人よりも適していると考えたからである。

調査時期は、2016年4月で、授業の開講時に調査を実施した。回収率は100%で、有効票は72票であった。

調査内容は、「手縫い学習」に関する意識、手縫いに関する家庭での実践状況、手縫い学習の有用性の意識調査、衣服を購入する際の消費者の視点などの質問項目を設定した。分析には、SPSS ver22. を用いた。

## 結果および考察

### 1. 学習指導要領と教科書の分析

手縫い学習に関する学習指導要領と教科書の記載について、表1に示す。まず、学習指導要領に関しては、C(1)イとC(3)イの内容が該当項目である。「衣生活の生活実践力を育む学習の構想」に則って分析すると、第3段階の「ものづくり」を目指して知識・技能の定着を目標に学習指導要領の学習項目が設定されている。取り扱いにおいても、実習だけでなくボタンが付いている状態を観察することでボタンの原理を考えたりするなど科学的な視点から、「ものづくり」を捉えている。教科書の学習項目では、技能を育む項目が多い。また、「ものづくり」の情意面については、学習指導要領では「製作の喜びを味わいながら手縫いなどの基礎的・基本的な知識及び技能が身に付くように配慮する」とあり、教科書では、「手縫いのよさを生かそう」や「布を使って生活が楽しくなる物をつくってみよう」とある。実際に、プレゼントをすることを想定した会話やメッセージカード例などの記載が見られた。

次に、第2段階の「衣服の管理」では、ボタン付けに関して、学習指導要領も教科書も衣服の手入れの学習項目に記載している。内容の取扱いには、「場面を変えて繰り返し指導する」など、知識・技能の定着を目標としている。

表1 手縫い学習に関する学習指導要領と教科書の記載

学習指導要領		教科書の関連事項
内容・項目	内容の取扱い	
<p>C(1) 衣服の着用と手入れ イ 日常着の手入れが必要であることが分かり、ボタン付けや洗濯ができること。</p>	<p>「<b>ボタン付けができる</b>」ということは、ボタンの付け方が分かり、自分で付けることができるようにすることである。ボタンは衣服の打ち合わせをとめるために必要であることが分かるようにする。また、ボタンを丈夫に付けることができるようにする。</p> <p>「<b>手縫い</b>」には、手で縫い針に糸を通したり、糸端を玉結び、玉どめにしたり、布を合わせて縫ったりすることなどがある。</p> <p>ここでは、児童の実態に応じた無理のない手縫いとして、なみ縫い、返し縫い、かがり縫いなどの縫い方を扱い、なみ縫いについては、2～3針続けて縫う程度でもよいと考えられる。</p>	<p>○衣服の着方と手入れ ・ボタン付け (A・B)</p>
<p>C(3) 生活に役立つ物の製作について イ 手縫いや、ミシンを用いた直線縫いにより目的に応じた縫い方を考えて製作し、活用できること。</p>	<p>「<b>目的に応じた縫い方を考えて製作し、活用できる</b>」については、製作するものや縫う部分によって、丈夫に縫ったり、針目を変えて縫ったり、ほつれやすい布端を始末したりするなど、目的に応じた縫い方があることを知り、それらを活用してその部分にふさわしい縫い方を考え、手縫いやミシン縫いを用いて製作ができるようにする。</p> <p>また、仕上がった作品を日常生活で活用することにより、手作りのよさを味わったり、製作方法や仕上がりの結果を評価したりすることができる。</p> <p>指導に当たっては、児童の実態を考慮し、細かな技法を一方向的に教え込むことがないようにし、製作の喜びを味わいながら手縫いなどの基礎的・基本的な知識及び技能が身に付くように配慮する。</p> <p>指導に当たっては、例えば、毎日の生活の中で、ボタンが衣服に付いている様子や日常着の汚れを観察したり、衣服の手入れについて実践していることについて発表しあったりするなど、児童の具体的な生活体験と関連付けて実感を伴う学習となるように配慮する。</p> <p>この学習では、ボタン付けをC(3)の学習と関連させて実習した後、再度手入れとしてのボタン付けの実習を行うことも考えられる。学習の場面を変えて繰り返し学習することにより、基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図ることも可能となる。</p>	<p>○さいほう道具について調べよう (A・B)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・玉結び、玉どめ、なみぬい、返しぬい、かがりぬい、ボタン付けをしよう (A・B)</li> <li>・ネームプレートをつくろう (B)</li> <li>・小物入れをつくろう (A・B)</li> <li>・手縫いのよさを生かそう (A)</li> <li>・身近に使える小物をつくろう (B)</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生活に役立つ布製品をつくろう (A) 例 トートバック、きんちゃく、クッションカバー、布製品のリフォーム</li> <li>・布を使って生活が楽しくなる物をつくってみよう (B) 例 マイバック、ななめナップザック、エプロン、まくらカバー</li> </ul>

最後に、第1段階の「衣服の選択・購入」については、学習指導要領も教科書もどちらにも記載がない。例えば、ボタン付けの仕組みを観察するところから、身の回りの衣服や商品購入の際の視点につなげると、具体的な場面を想定しやすいだろう。現在の生活では最も多くの方が、第1段階の「衣服の選択・購入」を行っており、消費者として商品の情報を読み取れる力を養うことは、豊かな生活を作ることに繋がる。消費生活分野の教科書の記載には、「めざそう買い物名人」の単元に「いろいろな商品の情報とマークの例」に既製服の品質表示の図は出ているものの、手縫い学習を発展させた「ボタン付け」や「縫製」の善し悪しをチェックする記載はない。衣生活と消費生活の学習の双方の有用性を高める上で、重要な課題となるのではないだろうか。衣生活の有用性並びに生活実践力を高めるには、「衣服の選択・購入」の観点で衣生活と消費生活の接続として横断的な題材設定が重要になると考える。

## 2. 大学生への「手縫い学習の生活実践力に関する調査」質問紙調査

### (1) 手縫い学習の生活実践に関する調査

「手縫い学習は生活や将来に役立つか」の問いに96%の学生が「役立つ・まあまあ役立つ」と答えており、有用感が高い。しかし、小学校から手縫い学習が役立った有無をみると、32%の学生が役立っていない実態である(飯田 2016)。ほとんどの学生は手縫い学習が将来や生活に役立つと捉えているが、生活実践の場では1/3の学生は役立たせていないと認識している。そこで、小学校で手縫い学習を学んでから今までにどのような学びを認識しているのかを明らかにするために、「手縫い学習でどのような学びがありましたか」について複数回答可で回答を求めた(図2)。「とれたボタンを付けられるようになった」が75%で最も多く、続いて「小物を作った」が54.2%、「ものづくりの楽しさを知った」が43.1%の順に回答数が多かった。手縫い学習を活用しようと思った理由について自由記述で回答を求めたところ、「できると楽しい」「興味がある」「自分の思いが込められる」などの記述が見られた。「学びの活用はなかった」と回答した学生は11.1%(8名)で、その理由は「家の人に教えられてできるようになった」「もともとできた」の2人の記述はあったが、残りの6人の理由は未記入であった。

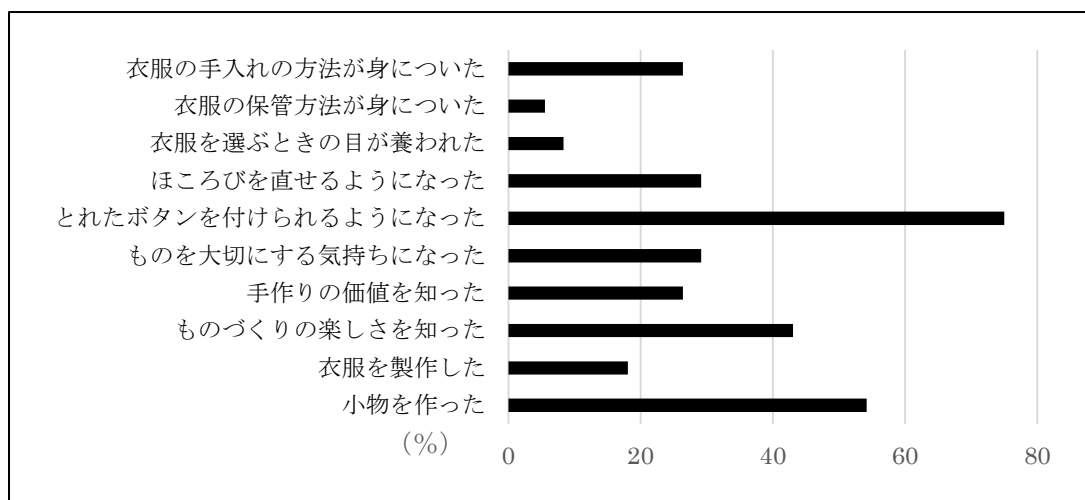


図2 手縫いの学習の学び

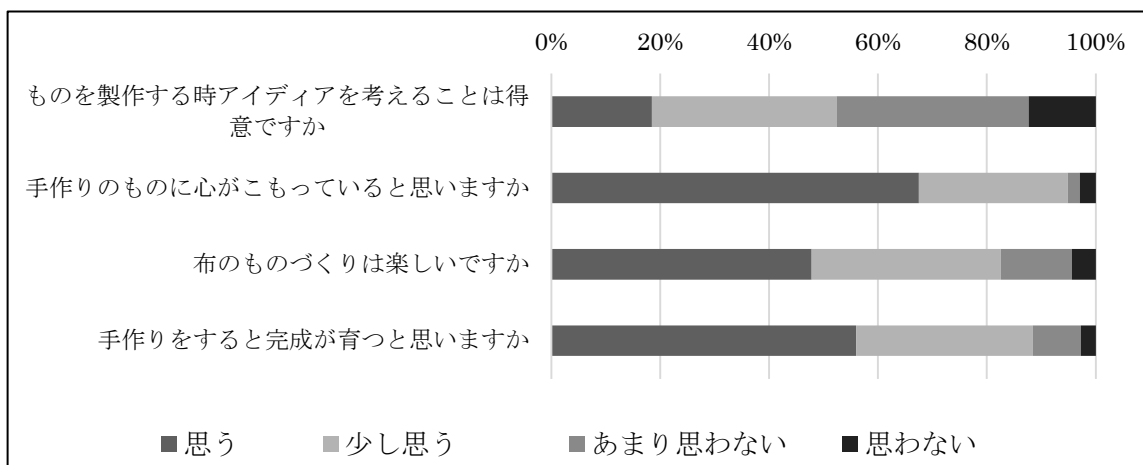


図3 「ものづくり」に対する意識

(2) 「ものづくり」における生活実践状況と意識調査

「小物を作った」と回答した者に「家庭でどのようなものを作ったか」の問いに、マスコットや小物入れという回答が9割以上であった。また、家族や友だちにプレゼントとして作ったという回答も多く、相手意識をもつきっかけ作りにも重要な題材といえる。

「ものづくりの」の情意面に関する結果は、図3に示す。質問4項目すべてにおいて肯定的な回答が過半数を占めている。特に「手作りのものには心がこもっていると思う」は肯定的な回答が最も多く91.7%であった。次いで「手作りをすると感性が育つと思う」は83.4%で、「布のものづくりは楽しい」は79.1%であった。前述の大学生調査でも小学校の時に手縫い学習が好きだったと回答した学生は76%いたことから、ものづくりの楽しさに関しても、肯定的に捉えている学生が多く、情意面からも小学校で学ぶ意義が高いことが考えられる。手縫い学習を経験してから10年経て、学生は、情意面において手縫い学習の有用性を感じていることが明らかになった。「布でものを製作しプレゼントすることで誰に喜んでもらいたいと思いますか」の質問に、「家族」と回答している学生が70.8%で、次いで「お世話になっている家族以外の人」は30.6%であった。「被災地や外国で困っている人」、「独居老人や介護施設の高齢者」、「保育所や幼稚園または福祉施設の子ども」と回答している学生は少ないことがわかった

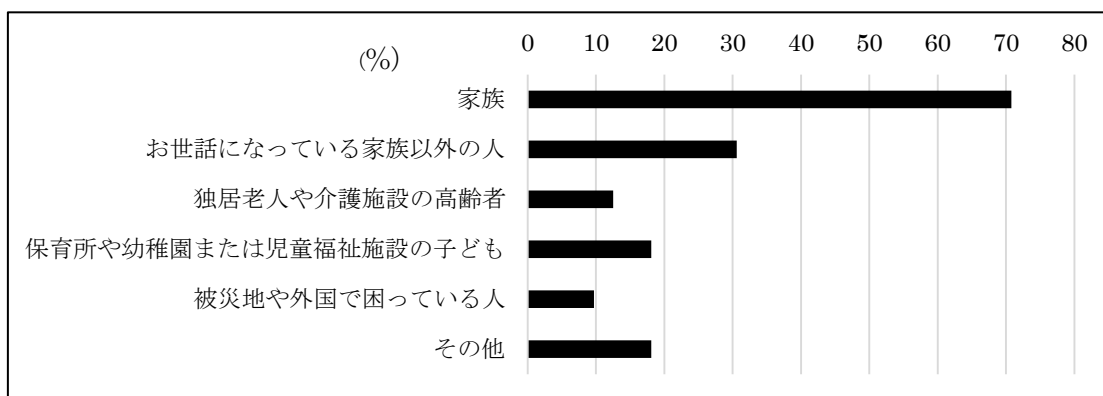


図4 手作り布小物をプレゼントしたい相手

(図4)。これは、家族への感謝が強く、プレゼントをしたいという気持ちも強くなるだろうが、技術面の稚拙さから家族以外への人にあげる気後れも考えられるのではないか。手縫い学習は、他者への感謝の気持ちを育む題材ではあるが、児童の気持ちと発達段階に配慮して、題材を設定する必要がある。

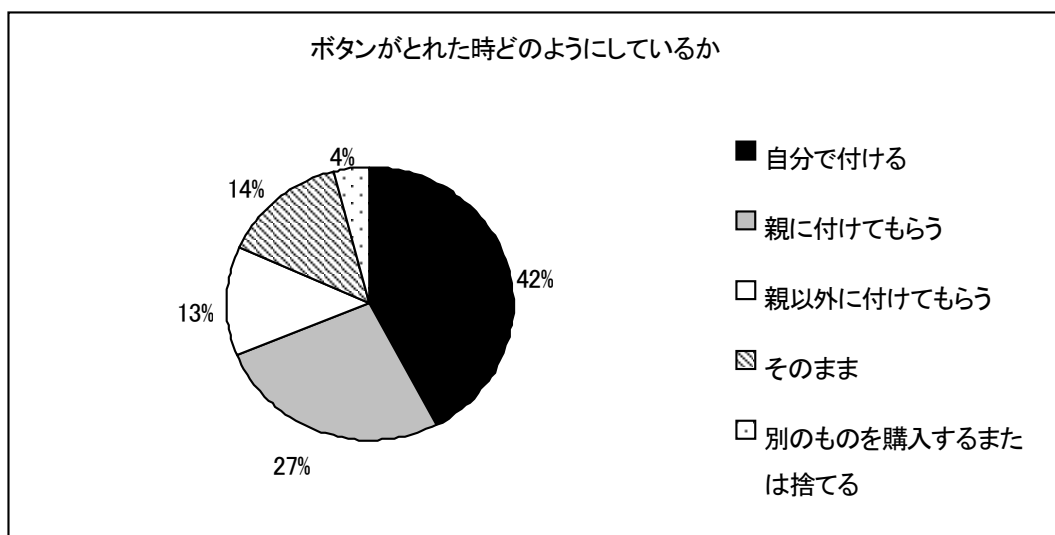


図5 ボタンがとれた時の対応 (複数回答)

(3) 「衣服の管理」における生活実践状況と意識調査

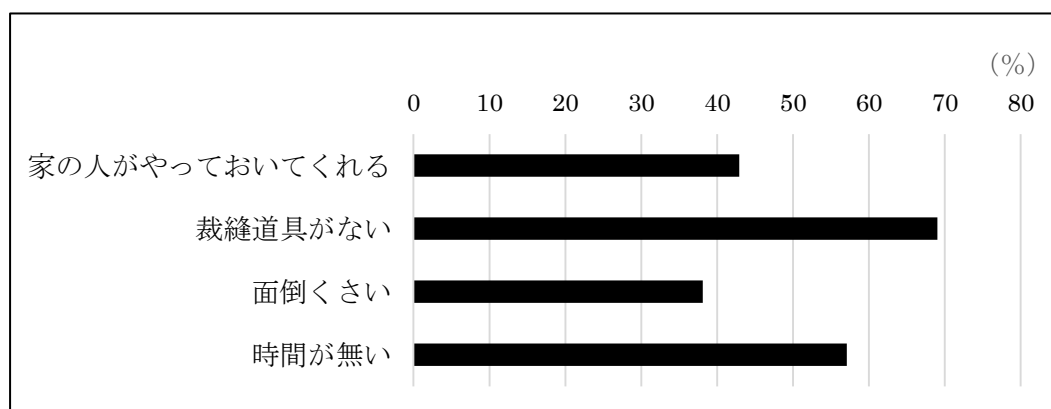


図6 ボタン付けを自分でやらない理由

「ボタンが取れた時どのようにしているか」の質問に、「自分で付ける」と回答した者が42%であった。次いで「親に付けてもらう」が27%で、「ボタンが取れてもそのまま」が14%、「別なものを購入するまたは捨てる」が4%であった(図5)。自分でボタンを付けない最も多い理由は、「裁縫道具がない」が69.0%で、次いで「時間が無い」が57.1%である。「面倒くさい」が38.1%であった(図6)。これらの回答は、物理的にも心理的にも技術的にも手縫いが身近ではない状況が見て取れる。生活に目を向け、生活を大切にするという意識付けが課題である。

## (4) 「衣服の選択・購入」の生活実践状況と意識

大学生の手縫い学習の「衣服の選択・購入」の生活実践状況と意識を明らかにするために、衣服を購入する際の視点を問う 11 項目について、「見る」「時々見る」「ほとんど見ない」「見たことがない」の 4 段階で求めたものである。「見る」を 4、「時々見る」を 3、「ほとんど見ない」を 2、「見たことがない」を 1 として得点化した。項目ごとの平均値、標準偏差は表 2 に示した。大学生が衣服を購入する際の視点について、各項目の平均点を比較したところ、4 点満点中最も高かったのは、「値段が適切か」が 3.78 で、次いで「サイズは合っているか」が 3.68 であった。一方、「素材は何でできているか」が 2.49 で最も低く、次に「手入れが簡単か」が 2.57 で、「ボタンはしっかりついているか」が 2.85、「可愛いく、格好良く見えるか」が 3.53 であった。さらに、大学生の衣服選択・購入における視点構造を明らかにするために、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。その結果、3 つの因子が抽出された。第 1 因子は、「ボタンはしっかりついているか」、「丈夫であるか」、「素材は何でできているか」などといった項目が高い因子負荷を示しており、衣生活の学習が生活実践に活かされている視点といえよう。そこで、この因子を「衣生活の生活実践力のある消費者の視点」と命名する。続く第 2 因子には、「着心地がよいか」、「値段が適切か」、「サイズは合っているか」といった多くの消費者が検討する項目群といえる。そこでこの因子を「一般的消費者の視点」と命名する。第 3 因子は、「TPO に合っているか」、「流行しているか」、「可愛いく、格好良く見えるか」といった衣服そのものよりも、流行や自己表現に焦点を絞った意思決定の視点である。そこでこの因子を「トレンド消費者の視点」と命名する。以上のような因子分析結果を踏まえ、大学生の衣服選択・購入における視点尺度の下位尺度を構成する。それぞれの項目を、最も高い負荷量を示す因子を構成するものと見なすと、「衣生活の生活実践力のある消費者の視点」の下位尺度は 5 項目、「一般的消費者の視点」および「トレンド消費者の視点」の下位尺度は 3 項目で構成される。次に、 $\alpha$  係数を用いて各下位尺度の内部一貫性を検討したところ、「衣生活の生活実践力のある消費者の視点」は 0.83、「一般的消費者の視点」は 0.66、「トレンド消費者の視点」は 0.60 であり、内部一貫性を有したものと見える。そこで、下位尺度ごとにすべての項目を用い、その合計を下位尺度得点とした。

下位尺度の平均点および標準偏差を表 2 に示す。若者の特徴に見られる流行や外見を重視するトレンド消費者視点や価格やサイズなど一般的に衣服購入時に着目する一般消費者の視点は数値が高く、家庭科の衣生活分野で習得すべき内容であるボタン付けや手入れなど基礎的な知識が身に付いていなければならないはずの衣生活系消費者の視点の数値は低いことが明らかになった。これらはより適切な衣服を購入する上で大切な要素である。価格やサイズを見て購入することは高い値が出ており、流行や外見にこだわることも若者の特徴として強く出ている。一方、素材やボタン、丈夫さなどに着目することは、衣服に関する専門的な知識が必要となる。これまでの衣生活の学習が十分に実生活に生かされていないことが考えられる。

この結果を踏まえて、手縫い学習がどの場面で役立つかをさらに詳査し、衣生活の学習を実生活に生かして、衣服の選択・購入する際の意思決定の視点を育むことをさらに考えていかなければならない。



表2 衣服の選択・購入における視点の因子分析結果表

	f1	f2	f3	平均点	標準偏差	因子平均点	因子標準偏差
ボタンはしっかりついているか	0.661			2.845	1.023		
丈夫であるか	0.697			3.176	1.036		
素材は何でできているか	0.834			2.485	0.970	2.790	0.778
手入れが簡単か	0.829			2.565	0.992		
長く着られるか	0.736			3.015	0.953		
着心地がよいか		0.706		3.492	0.904		
値段が適切か		0.757		3.778	0.580	3.667	0.580
サイズは合っているか		0.779		3.682	0.788		
TPOに合っているか			0.493	3.162	0.971		
流行しているか			0.818	2.926	1.055	3.170	0.690
可愛い、格好良く見えるか			0.830	3.530	0.728		
寄与率(%)	32.81	21.02	12.56				
累積寄与率(%)	32.81	53.830	66.39				

## まとめ

本研究では、小学校家庭科における手縫い学習の有用性を高めるために、「衣生活の生活実践力を育む学習の構想」の枠組みに則って、手縫い学習の学習指導要領と教科書での位置づけと手縫い学習の大学生の生活実践状況と意識変容を示した。「衣生活の生活実践力を育む学習の構想」の枠組みを援用したのは、基礎基本の学習を活用できる状態にまで高めるには、学習者の意欲や関心、実践するに当たっての環境要因、身に付けたスキル（技能）などが関与してくる（武藤 1998）ためである。現代のライフスタイルに則した生活実践力の捉え直しを行うことは、家庭科学習の有用性を高めることである。

本研究では、学習指導要領と教科書における手縫い学習の位置づけと大学生の手縫い学習の生活実践状況を「衣生活の生活実践力を育む学習の構想」に則って分析し、次のことが明らかとなった。

- 1) 学習指導要領、教科書における手縫い学習は、技術面・情意面の両面から「ものづくり」における技能の習得を目標としている。「衣服の管理」を具体的な生活実践の場として示し、繰り返し基礎・基本の技能習得ができるように工夫されている。「衣服の選択・購入」については、具体的な記載が無かった。

- 2) 大学生の手縫い学習における学びとして、「とれたボタンがつけられるようになった」「小物を作った」があげられているが、実際に「ボタンがとれたときの対応」では「自分でつける」という回答は、全体の1/3であった。
- 3) 大学生の手縫い学習における学びとして、10年後においても技術面・情意面での効果を認識していた。
- 4) 大学生の衣服選択・購入時における視点の構造は、下位尺度が「衣生活の生活実践力のある消費者の視点」「一般的消費者の視点」「トレンド消費者の視点」により構成されていることが明らかとなった。平均点は、「一般的消費者の視点」「トレンド消費者の視点」「衣生活の生活実践力のある消費者の視点」の順になっていた。手縫い学習と消費生活の横断的な学習により「衣生活の生活実践力のある消費者の視点」が向上すると考える。

今後の課題は、小学校教員の意識調査をし、その現状と課題を明らかにし、衣服学習の生活実践力を高めるためのカリキュラム作りの基礎資料とすることである。

## 引用文献

- 福田公子・多々納公子. 2005. 『教育実践力をつける家庭科教育法』10(大学教育出版).
- 速水多佳子・黒光貴峰. 2014. 「大学生の家庭科における調理、被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題」『日本家庭科教育学会誌』第57巻,1号,14-20.
- 飯田容子. 2016. 「生活実践力を育む衣生活における学習指導の在り方～基礎・基本の確実な定着と批判的思考力の育成～」『茨城大学教育学部 内地留学研究報告書』5-40.
- 文部科学省. 2008. 中央教育審議会答申.
- 武藤八重子. 1998. 『家庭科教育再考』99-100(家政教育社).
- 中間美砂子・多々納道子編著. 2011. 『中学校高等学校家庭科指導法』8,92-94(建帛社).
- 西敦子. 2005. 「小学校の消費者教育における学習展開過程の研究」22-23(生活文化研究).
- 坂井知美・池崎喜美恵. 2004. 「小学校家庭科における手縫い学習に関する研究」(第1報)一先行研究調査との比較一. 『東京学芸大学紀要6部門』47-48.
- 櫻井純子. 2010. 『わたしたちの家庭科』(開隆堂)
- 竹吉昭人・多々納道子. 2006. 「家庭科教員の指導実態からみた製作活動の教育的意義」『島根大学教育学部紀要』第39巻,19.
- 渡辺彩子. 2016. 『新しい家庭科』(東京書籍)
- 横井佳織子・榎並典昭. 2003. 「基礎・基本の確実な定着と豊かな生活に向けての実践的態度を高める技術・家庭科」『北海道教育大学教育学部附属函館中学校研究紀要』126-131.